「もしも」「まさか」のあなたを守る

救急・消防最前線

vol.20

救命率向上に一歩前進 救急救命士の処置が拡大されました

医師の具体的指示を得なくても、救急救命士による除細動（電気ショック）が実施できるようになりました

市消防本部 ☎53 0123

近年の救急活動状況

現在、北・南消防署では、救急車四台（うち高規格救急車三台）、九人の救急救命士が中心となって救急活動を行っています。

平成十四年中の救急出動件数は千六百十三件、救急隊が心肺停止傷病者に対して心肺蘇生法を行いながら病院に搬送したのは五十三人、そのうち救急救命士が除細動（電気ショック）を実施したのは五人でした。

救急救命士が行う除細動（電気ショック）とは？

救急救命士が除細動（電気ショック）を行うのは、通常、「心室細動」という心電図を示したときです。

これは、何らかの原因で心臓が小刻みにけいれんしてしまい、心臓が全身に血液を送るポンプとしての役割を果たしていない状態のことです。

その処置方法は、その場に居合わせた家族などの心肺蘇生法も有効ですが、除細動が最も有効な処置方法です。

しかも、一刻も早く行うことが、救命率を大きく向上させるといわれています。

医師の具体的指示なしに除細動が可能になり、救命率のアップが期待

今まで、除細動を行う場合は、医師から直接指示を受けて行っていましたが、昨年十二月から、医師の具体的指示を得なくても除細動ができるようになりました。

救急救命士が実技試験を行うなどの事前の研修を十分行い、救急隊の行った処置を検討するなど、隊員のレベルアップを図ったことで、医師の具体的指示を得なくても、救命士の判断で除細動ができるようになったものです。

これにより、早い処置が可能となり、さらなる救命率アップが期待されます。

消防に関するご意見・ご質問は

・北消防署 ☎53 0119
・南消防署 ☎58 0119
・濃南分駐所 ☎52 0119
へどうぞ。

知って得する

暮らしのアドバイス No.3

子供の誤飲① ～お酒・たばこの場合～

誤飲事故が多い子どもの年齢は、好奇心が強い１～３歳くらい。口に入る物なら何でも入れてしまうので、保護者は常に目配りが必要です。

お正月は、大人が集まってお酒を飲む機会が増え、子どもの誤飲事故が起こりがちです。

飲みながら話に夢中になっていたり、お客さんを玄関で見送るほんの少しの間に飲んでしまうことが多いようです。また、大人がうっかりジュースや水と間違えて与えてしまうこともあるので、注意が必要です。

お酒は、飲んだ量が多いと中枢神経が抑制され、呼吸不全を引き起こして死に至ることもあります。

なめた程度であれば、水か牛乳を飲ませて様子を見ます。

それ以上の量なら、指でのどの奥を刺激して吐かせて（意識がはっきりしない場合は吐かせないで）病院で受診してください。

しょうゆ、お茶葉、大量のコーヒーなどを誤飲した場合も、水か牛乳を飲ませて吐かせます。

たばこは、毒性成分のニコチンに吐き気を催す作用があるので、誤食しても吐き出すことが多いようです。

しかし、たばこ１本には乳児の致死量を超えるニコチンが含まれているので、危険に変わりはありません。

特に、飲み物の空き缶に水を入れて灰皿代わりにしていると、子どもがジュースと勘違いして飲んでしまうことがあります。水分でニコチンの吸収が早まるので、たばこそのものの誤食より危険です。

たばこや灰皿は、絶対に子どもの目に付く所に置かないことが大切です。

たばこを誤食・誤飲した場合は、何も飲まないですぐに病院へ。

このとき、素人が無理に吐かせようとするのは避けてください。のどを詰まらせて、かえって危険な状態になる場合があります。